



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3121 号 2016.7.11 発行

「児童婚」に異議、国連人口基金が動画で啓発

毎日放送 2016年7月11日

11日の「世界人口デー」を前に、UNFPA＝国連人口基金は、未成年を結婚させる「児童婚」は子どもの成長や発達を阻害するとして、こんな動画を制作・公開しました。レバノンの首都ベイルートの有名な海岸通りで記念写真に収まるのは、初老の男性と、まだ10代前半とおぼしき少女。道行く人の中には「おめでとう」と言う人もいますが・・・
 「そんな写真を撮って楽しいか？そこにただ立っただけでいいのか？」(通行人)
 「君には関係ない。私は妻といるだけだ。彼女の両親も我々の結婚を認めている」(“新郎”)

「まるで、おじいさんと孫のようじゃないか」(通行人)

「君には関係のないことだ」(“新郎”)

「お嬢ちゃん、本当に結婚したい？」(通行人)

「パパとママはどこにいるの？」(通行人)

「君には関係ない」(“新郎”)

「関係なくないわ。彼女はたったの12歳よ」(通行人)

これは、国連人口基金が中東やアフリカなどで根強く残る児童婚に異議を唱えるためにNGOと協力して作った動画で、役者が演じるにせの新郎新婦に対する、道行く人々の反応を収録したものです。

国連によれば、18歳未満との結婚が法律で認められている国は南アジアを中心に、アフリカや中東などに数多く存在し、現在、7億人を超える女の子が児童婚を経験しています。女の子が児童婚させられた場合、妊娠・出産による死亡リスクが高まるほか、暴力や虐待の被害も受けやすい上、教育を受ける権利も奪われます。

発展途上国では3人に1人の女の子が18歳未満で結婚していて、今の水準が続けば2030年には児童婚の経験者は9.5億人に上ると国連は試算しています。

発達障害への偏見って？ 高校生と神戸大教授研究

神戸新聞 2016年7月11日

学会発表に向けて話し合う生徒ら＝六甲アイランド高校



「発達障害に対する高校生のスティグマ(偏見)」。神戸大大学院人間発達環境学研究科(神戸市灘区)の鳥居深雪教授(発達障害臨床学)と六甲アイランド高校(神戸市東灘区)の共同研究テーマだ。発達障害のある人と関わった経験の有無などを同校生徒から聞き取り、何が偏見につながるのかを探った。10月に高松市である日本教育心理学会総会で発表する。

鳥居教授は昨年5月、同校の全生徒に「障害理解授業」を実施。授業の前後でアンケートした結果、授業後、発達障害がある人への心理的

距離が近くなるのがうかがえた。さらに調査を深めようと、協力者を募ると、生徒4人が手を挙げた。

2年の山崎未来さんは、近所に発達障害のある子がいる。「この子が就学後、偏見がない環境になってほしい」。そんな思いから調査に加わった。

鳥居教授のアンケートから、正しい知識を得ると、心理的距離は近くなる傾向がみてとれた。生徒は「知識には経験が関係するのでは」と考え、昨年12月、無作為に選んだ生徒69人から聞き取った。打ち解けて話が弾む場合もあれば、そっけなくされてくじけそうになることも。別の2年の女子生徒は「人の考えを聞く機会があまりないので、そんな考えもあるんだと見識が広がった」と話す。

調査結果からは、発達障害のある人との関わりの有無だけでなく、その体験の質が偏見に影響することが分かった。聞き取りを終え、現在、学会発表の資料を作成中だ。

3年の女子生徒は「研究には、根拠に基づいた論理的思考が必要。普段の生活であまり経験しないことだったので、いい体験だった」と話す。別の2年の女子生徒は「まだまだ聞けてないことがある。機会があれば研究したい」と話した。(中川 恵)

ひと交差点 学習障害の子ども支援 渡辺隆史さん／北海道

毎日新聞 2016年7月10日

渡辺隆史さん

NPO法人「ジャイフル」(札幌市中央区)理事長を務める渡辺隆史さん(39)＝北広島市。発達障害やその疑いがあり、学習に不安のある子どもたちを対象としたフリースクールや塾、放課後デイサービスを運営し、計約100人の子どもたちの学習支援を行っている。

高校時代に通っていた塾が学習障害の子どもを指導していたことから、支援に興味を持った。団体職員などを経て、2011年にジャイフルを設立した。

子どもや保護者の悩みはさまざま。基礎的な読み書きや計算が苦手だったり、通常的生活リズムが身につけていなかったりする。「学校や医療機関などと子どもの弱点を共有・連携し、その子どもに応じた支援に取り組んでいる」

板書を写すことが苦手な子どもには、学校の先生にデジタルカメラで黒板を撮影してもらい、画像データを指導に役立てる。「子どもたちに主体的な力をつけてほしい」と奮闘する。【一條優太】



今井絵理子氏が初当選…「障害児を持つ母として、当事者の声を国政に」

スポーツ報知 2016年7月10日

参院選に初当選した今井絵理子氏(左)は長男・礼夢くんと「アイラブユー」の手話喜びを分かち合う(右は山東昭子議員)

参院選に自民党比例代表で立候補した、「SPEED」の今井絵理子氏(32)の当選が確実となった。NHKが午後8時11分に、当選確実を報じた。

今井氏は「今がスタートラインということで、すごく責任感、使命感を果たせるよう頑張っていきたいなと思っている次第です。7年間のボランティア活動を続けてきました。障害者の方々、当事者の声を聞いて参りました。私自身も障害児を持つ母として、きちんと当事者の方々の声を国政に届けるように“ぞうきんがけ”からかもしれませんけど、一步一步頑張って、みんな笑顔があふれる、誰もが平等に過ごせる



ような国造りを頑張りたいと思います」とNHKの中継で述べた。

今井氏は聴覚障害がある長男（11）をシングルマザーとして育ててきており、2月の会見では、手話を交えながら「障害がある子どもたちがより明るい希望を持てる社会をつくりたい」と述べ、社会福祉の充実に意欲を示していた。当選後、歌手を続ける考えも示している。

三原じゅん子氏ぶっちぎり当選「総合力の勝利」 日刊スポーツ [2016年7月10日]

第3次安倍政権発足後初の大型国政選挙となる第24回参院選は10日、投開票された。全国比例代表から神奈川選挙区（改選数4）に鞍替えして参院選に出馬した自民党現職の三原じゅん子参院議員（51）は、午後8時の開票開始直後に当選を決め、横浜市の事務所では拍手と歓声が湧き起こった。三原も支援者らと笑顔で喜びを分かち合った。

「神奈川自民党の総合力の勝利だと思っています。複雑な選挙区だったと思いますけど、ひとつになって戦えたこと、そこが何よりの勝因だったと思います。社会保障や医療、介護福祉政策、そして女性の活躍にしっかり取り組んでいきたい」。

10年参院選で初当選した際は比例代表だったが、今回、神奈川県選挙区に鞍替え。しかし、三原氏1人を公認して万全の戦いを展開したかった自民党神奈川県連と、公認を2人擁立して、攻めの選挙をしたい安倍晋三首相や党サイドの思惑が対立。公認申請は昨年秋だが、実際に公認がおりたのは、今年に入ってからだった。

その間に自民党は、麻生太郎副総理兼財務相が白羽の矢を立てた無所属の中西健治氏を推薦、与党の関係を重視した菅義偉官房長官が、公明党候補の推薦にも動いた。自民党の公認候補として戦いながら、官邸の中で微妙な関係にある「麻生VS菅」の代理戦争という「場外戦」にも巻き込まれる形になった。三原は当選後、中西氏について問われたが「私は何も話をきいていないので」と多くを語らなかった。

また、前回の選挙戦との違いを実感していることを強調し「厳しい戦いだった。やはり1期目とは責任の重さが違うんじゃないかと思う。神奈川選挙区に変わりました、県内を本当に幅広く回らせていただいた。神奈川の皆さんの役に立つ政治家にならなければならぬと、決意を新たにしているところであります」。

今回の選挙から投票可能となった18、19歳の若者については「私は意識していませんでした」としながら、選挙活動で30～40代の女性から介護についての相談を受けることが多かったと明かし「ただ、今の女の子たちがこのまま高負担の（介護）人生を歩むのは違うかなと思っている」と話した。

応援に入った小泉進次郎農林部会長が「勝つだけではない。ぶっちぎり、ぶっちぎり、ぶっちぎりで勝たなければならない」とはっばをかけるなど、唯一の自民党公認候補としての「重圧」ものしかかっていた。複雑な状況から、当選を不安視する声も少なからずあった。

しかし、ふたを開けてみれば、言葉通りの「ぶっちぎり」の完全勝利となった。

「これほど盛り上がらない選挙も久しぶり」識者見解 スポニチ 2016年7月11日 第24回参議院選挙（7月10日投開票）

▼浦田一郎・明治大教授（憲法学）与党は参院選前には盛んに憲法改正論議をしていたのに、選挙戦では争点から外した。隠したこと自体がいかにか大きな争点であるかを示している。安倍首相も、改憲については国民投票で決まるのであり、選挙の争点ではないと言っていたが、違う。改憲の国会発議ができるかどうかの分かれ目であり、憲法改正の是非を真ん中に置き戦うべきだった。

▼八木秀次麗沢大教授（憲法学）憲法改正に反対する野党は、憲法問題を争点にすることに失敗した。一方、与党は昨年の安全保障関連法成立時のような世論の盛り上がり懸

念し、選挙戦で改憲を取り上げることをマイナスと考えたのだろう。結局は安倍首相が言うように、アベノミクスの是非を問う選挙になった。経済政策で代案を示しきれない野党への支持は広がらず、事実上の信任投票。これほど盛り上がらない選挙も久しぶりだったのではないか。

▼国際医療福祉大川上和久教授（政治心理学）選挙戦を通じて各政党や候補者は高齢者受けする政策が目立ち、若者へのアピールが不十分なように感じた。若者の意識を高めるためには、学校における主権者教育の徹底や、自治体などによる模擬投票の実施など、積極的な取り組みをしていく必要がある。

経済界「抜本改革の加速を」「増税へ環境整えて」

日本経済新聞 2016年7月11日

参院選を受け、経済界には社会保障制度改革や景気てこ入れを期待する声広がった。

日本自動車工業会の西川広人会長は、「英国の欧州連合（EU）離脱などで世界経済は不透明な状況にあり、デフレ脱却と経済再生の確実な実現を」と要望した。

経済同友会の小林喜光代表幹事は年金の給付水準見直しや財源に関し、「各世代を巻き込み、抜本改革を加速すべきだ」と強調。三越伊勢丹ホールディングスの大西洋社長も社会保障改革について「実行力に期待する」とするなど、将来不安の解消を求める声が目立つ。

日本商工会議所の三村明夫会頭は再延期した消費増税を巡り、「2019年10月に確実に実施する環境を整えて」と注文をつけた。

関西でも与党圧勝を歓迎する声が多い。関西経済連合会の森詳介会長は、リニア中央新幹線の大阪延伸実現に向け、「財政投融資活用等の検討を早急に進めて」とコメントした。

関西経済同友会の鈴木博之代表幹事は、「東京一極集中の是正は急務であり、関西の活性化に向けIR（統合型リゾート）推進法案の次期国会での成立を望む」とした。

中小企業の間でも期待は大きい。給排水設備を設計・施工するローヤルエンジニアリング（東京・豊島）の河原八洋社長は「労働者は将来不安のため給料を貯蓄にまわす傾向がある。社会保障を充実し、消費を促してほしい」と語った。

経済界コメント	
経済同友会	小林喜光代表幹事
国民の痛み伴う改革に挑戦を	
日本商工会議所	三村明夫会頭
潜在成長率を高める構造改革を	
日本チェーンストア協会	清水信次会長
軽減税率はなにが合理的かの観点から冷静に見直して	
三越伊勢丹ホールディングス	大西洋社長
社会保障制度の具体化と地方経済活性化の具体的な戦略実現を	
ANAホールディングス	片野坂真哉社長
経済政策の着実かつスピーディーな遂行を	
関西経済連合会	森詳介会長
リニア中央新幹線は大阪延伸、早期開業に向け早急に検討してほしい	
大阪商工会議所	尾崎裕会頭
補正予算は新たなリーディング産業の育成策を盛り込んで	
住宅生産団体連合会	和田勇会長
内需重視の経済対策を打ってほしい	

<参院選>「そのうち」に潜む危うさ

河北新報 2016年7月11日

◎取締役編集局長 鈴木素雄

与党圧勝の結果が出る中、東北の6選挙区は野党統一候補が5勝し際立った対照を見せた。被災地にはアベノミクスの余光が届いていない。先が見通せない環太平洋連携協定（TPP）や、全国に先駆けて超少子高齢社会に到達した東北に渦巻く将来不安が政権に反旗を翻したと言えよう。

選挙期間中、候補者や各党の訴えを聞いていて、ある歌詞のフレーズが何度も脳裏をよぎった。♪ぜにのないやつあ俺んとこへこい 俺もないけど心配すんな

50代以上の方なら、そらで口ずさめるだろう。故青島幸男さんが作詞し、故植木等さんが歌った『だまって俺について来い』。東京五輪景気に沸く1964年にリリースされた。この年の実質経済成長率は11.2%。ゼロ成長に沈む近年とは雲泥の差だ。だからだろう、歌詞の結びはこうなる。♪そのうちなんとかなるだろう

選挙戦で、一つだけ争点とならなかったテーマがある。消費税増税の再延期問題だ。選挙直前になって安倍晋三首相が2019年10月まで見送ると表明、野党も同調した。一方で各党の公約には医療、介護、子育て関連の充実策が数多く並んだ。財源はと言えば、景気回復による税収増や行政改革など心もとない。まさに♪そのうちなんとかなる、である。既に国と地方の借金残高は1千兆円。近い将来、消費税率20%超が必要という試算も出ているのに。

植木さんが♪そのうちなんとかなる、と歌う2年前に主演した映画のタイトルは『ニッポン無責任時代』だった。平（たいら）均（ひとし）なるラテン系サラリーマンの出世物語。半世紀余を経て中間層は痩せ細り、「平均」から「下流」への階層移動が進む。

参院選では経済政策と社会保障政策が二大争点だった。だがそれは「当面の」、やや厳しく言うなら「目先の」という留保が付いた論戦ではなかったか。末孫へのつけ回しという「真の争点」は巧妙に隠された。

国柄を左右するテーマであっても、選挙対策として忌避しておく。憲法改正問題も同じ文脈で考えることができる。安倍首相は選挙戦で持論である改憲論を封印、安倍政権下での改憲反対を主張する野党との議論はかみ合わなかった。改憲論議が後景に退く中、「改憲勢力」が静かに伸長し、発議の可能性が高まった。

「良識の府」を標（ひょう）榜（ぼう）し、本来は中長期的な課題について党派を超えて議論すべき参議院。投票率が振るわなかったのは国民との対話不足も一因だろう。政治に「魔法のつえ」などないからこそ、政治家には困難に立ち向かう意志が求められる。不愉快な事柄に対（たい）峙（じ）することを嫌い、安逸をむさぼる姿勢を「安楽への全体主義」と批判したのは日本思想史家の故藤田省三さんだった。

用紙交付ミスや二重投票相次ぐ

共同通信 2016年7月11日

全国の参院選投票所では10日、選挙区と比例代表の投票用紙を誤って逆に交付したり、期日前投票を済ませた有権者に誤って投票用紙を交付し、二重投票させたりするミスが相次いだ。青森市では、選挙管理委員会が選挙区と比例代表で、約2千人分の不在者投票を二重集計するミスがあったと明らかにした。開票結果に影響はなかった。

大阪府和泉市の2投票所では、計53人に選挙区と比例代表の投票用紙を取り違えて交付し、岐阜県羽島市で31人に、愛媛県上島町で20人に同じミスがあった。福島県郡山市では選挙区の投票をする19人に比例代表の用紙を交付。同様のミスは北海道や青森、山形、埼玉、神奈川、石川、奈良の各県でもあった。誤った分は選挙区、比例代表とも無効となる見通し。

秋田県大館市の投票所では、期日前投票を済ませた高齢の女性に誤って投票用紙を交付し、二重投票させた。女性は「期日前投票を済ませたか、あまり覚えてない」と話したという。静岡市清水区でも女性が二重投票。兵庫県では県内で転居した男性が、転出に伴う市の事務処理の誤りで期日前投票を二重にした。神戸市東灘区でも男性が期日前投票を2回行った。ほかの票と区別できないため、いずれも有効票となる。

一方、兵庫県尼崎市の投票所1カ所では、投票管理者を務める市の男性福祉課長（55）が寝坊で遅刻。投票開始が10分遅れた。本来の開始時刻の午前7時には25人前後が訪れていたが、うち7、8人が投票を待たずに帰ったという。

大津市の投票所では、比例代表の投票記載台に誤って選挙区候補者の一覧を掲示。誤っ

た掲示をした1時間程度の間には3人が投票していた。〔共同〕

余剰物品を途上国へ 東南アジアで雇用創出 大阪日日新聞 2016年7月10日

大阪市内の団体が窓口となり、企業から寄付として募った余剰の在庫やリユース品を東南アジアの途上国へ商品として輸出している。本来まだ利用できるのに廃棄されていた衣料品などを需要がある場所へ届け、資源の有効活用や環境保全を図る。特徴は現地で雇用を生み、さらに収益の一定額を福祉、教育関連施設に寄付する仕組みだ。団体は「子どもたちの笑顔で、循環型社会をつくりたい」と目標を掲げている。

これまで企業が費用を掛けて廃棄していた在庫品を処分前に「寄付」として受け取る。そして現地で現金化したものを子どもや社会に循環していく。製品が処分される現状を見かねた有志らが事業を立ち上げた。



6月にオープンしたカンボジア2号店（アセアン・リユース・プロジェクト提供） ■ハブの役割

「どんどん支援者を募りたい」。昨年12月に設立した一般社団法人「アセアン・リユース・プロジェクト」（大阪市中央区、篠原幸世代表）理事の郡文治さん（47）が熱弁を振るう。法人は受け取った物品を現地へ送るハブの役目を果たす。

海運で送るのは皿や茶わん、タオル、せっけんといった生活雑貨や家具、衣料品などで、1カ月当たりの搬出は40フィート規格のコンテナに隙間なく詰めて2台分。140立方メートルに及ぶ。必要なものは修繕し、「日本のリサイクルショップで売られるぐらいのもの」を提供するのがモットーだ。

■教育水準の向上

リサイクル店経営のため現地に雇用が生まれる。大人が働けば子どもたちの生活が向上し、教育水準も上がるというのが理想とするモデルだ。アジア最貧国の一つ、カンボジアでは6月、世界遺産アンコールワットに近いシェムリアップに国内2号店を開業させたばかり。タイでは昨年6月に1店舗、ネパールでも計画がある。

2014年に立ち上げた首都プノンペンの1号店では、当初は商品や売り上げが盗難に遭うなど混乱もあった。それでも現地の日本人スタッフに新たに経営を任せ、7千円程度だった月給が物価上昇も手伝って3年で1万5千円に倍増し、今では国内平均並みの水準に追い付いた。

■さらに広げる

1カ月の売り上げは1号店で350万～400万円。そのうち収益の3割に当たる約20万円が施設へと寄付されている。用途は学費や学校建設費用。カンボジアでは児童養護施設を通じ、タイでは身体障害児院を経て国民に届く。施設で暮らす子どもの父母らを雇う。施設で育った子どもが教育を受け、やがて社会へ還元する。

8月以降にはカンボジアで3号店を開業する予定だ。郡さんは「東南アジアにもっと輪を広げたい」と話している。

問い合わせは電話06（6223）7799、同法人。

施設の枠超え介護支援 被災地活動「チーム伊万里」 佐賀新聞 2016年07月10日

■派遣計18人成果と課題も

熊本地震の被災地でグループホームの支援などを行っていた伊万里市内の介護事業者による「チーム伊万里（ICAT）」が4班にわたる活動を終えた。施設の垣根を超えてチームをつくり、支援の行き届かない介護施設をサポートした。伊万里市役所で6日、塚部芳和市長らに活動成果と被災時の福祉現場の課題を報告した。

4月14日と16日に震度7の地震があり、社会医療法人「謙仁会」（山元章生理事長）は日本医師会の要請ですぐに医師と看護師を派遣した。そこで支援が行き届かない介護施設があることを知り、まず謙仁会の看護師や介護福祉士ら5人の支援チームを派遣。さらに災害時相互協力協定を結んでいた市内の介護事業者に呼び掛け、5施設の職員混成によるICATを結成した。第1班（5月17～20日）から第4班（6月28日～7月1日）まで計18人が益城町のグループホーム「津森倶楽部」で入所者18人の介護に従事した。



被災地のグループホームでの支援活動について報告した「チーム伊万里」のメンバー。活動報告書は近く市役所の1階市民ホールに展示する予定＝伊万里市役所

「施設職員の心と体のケアが一番の課題」。チームの複数のメンバーがそう話した。自宅が被災し、避難所や車中泊で生活しながら勤務し、空いた時間は家の片付けや罹（り）災証明の手続きなどで手一杯。6月の大雨もストレスとなった。第4班の隊長を務めた介護福祉士は「過剰な元気付けにならず、次の生活につなげていけるような支援を考えた」と語った。

ホームには保存食しかなく、レトルト食品を「塩分が強いから」と水で薄めて食べさせている光景にも衝撃を受けた。次の班に管理栄養士が加わり、栄養面の改善にも気を配った。

チームは第4班で活動をいったん終了。状況判断し場合によってはサポート継続も検討するが、「自立の道を歩んでもらうことが重要」と考えている。

山元理事長は「医療は災害時に外からの支援が進むようになったが、福祉現場にはそれがなく、空白地帯が生まれてしまう」と対策が必要なことを指摘した。

しまねのひと 県立中央病院でボランティアを続ける 米原ゆきみさん / 島根



毎日新聞 2016年7月10日

島根県立中央病院でボランティアを続ける米原ゆきみさん＝島根県出雲市で、山田英之撮影

米原ゆきみさん（69）

県立中央病院（出雲市姫原4）に行くと、1階のロビーに若草色のエプロンをした人たちがいる。病院内で案内や介助などのボランティア活動をする団体「ハーモニー」のメンバーだ。その一人、米原（よねはら）ゆきみさん（69）＝出雲市＝は1999年からボランティアを続け、活動時間は通算2500時間を超えた。若草色のエプロンは、着用すると「気持ちしがしゃきつ」と話す。

ハーモニーは、患者を診療科や病棟に案内したり、車椅子利用者を介助したり、院内のイベントも手伝う。メンバーは26人。月～金曜日に交代で常駐している。これまでに知事、病院長、出雲市社会福祉協議会から感謝状や表彰状を贈られた。

ハーモニーの存在を「病院の応援団であり、患者さんの代弁者」と表現する。患者から聞いた声を病院側に伝え、玄関脇の風よけ▽受付カウンター前の手荷物置き場▽医療費の自動支払機の場所を示す案内表示の一の設置につながった。

病院とボランティアの関係は「上下ではなく、平らな関係。外から人が入ることで、病院の風通しが良くなる」とみている。

長く続けられた原動力は、患者からかけられる「ありがとう」の言葉。患者の尊厳を傷

つけない対応をするために、病気や障害について勉強することを常に心がけている。

「最初は誰もが人の役に立ちたいと思って活動を始める。けれど、続けるうちに自分の生きがいになっている」と、新しいメンバーを募集している。【山田英之】

■人物略歴 1946年、出雲市生まれ。出雲高校卒。名古屋市内の大手繊維会社に就職後、古里の出雲市に戻って結婚した。現在、ボランティア団体「ハーモニー」代表、出雲市総合ボランティアセンターのセンター長を務めている。

春秋

日本経済新聞 2016年7月10日

詩人の谷川俊太郎さんに「十八歳」という作品集がある。その名の通り、18歳のころ書いた詩を集めた本だ。収録作の「傲慢ナル略歴」は「トモカクモ満零歳カラ十八歳マデ／オモシロオカシクヤッテキタ」と始まり、幸せで悩みもないと続く。明るい青春を思わせる。▼しかし別の詩では「ある夜／僕はまったくひとりだった」と嘆いたり、自分の分身に「十代の幼稚な尻尾と／十代のまじめな眼」を持つ子犬を創ろうと考えたり。実際の谷川さんは教師になじめず、不登校にもなった。高揚感に包まれる日もあれば、無力感にいら立つ日もある。詩集からは18歳の揺れ動く気持ちが伝わる。▼かつて「19才」という歌を作ったのは歌手、さだまさしさんだ。1人で生きていきたい。しかしその度胸はない。歌の主人公は自分を「歯がゆくて中途半端」だと愚痴る。子供でもなく大人でもない18歳、19歳は昔も今も落ち着かない時期かもしれない。この年齢の若者が初めて投票権を得た国政選挙が投票日を迎えた。▼若者は未来からの使者だといわれる。人生の終幕が見え始めた世代よりも、遠い将来を自然に見据え、その行動が実際に未来の形を決めていくからだ。投票もまた自分らの望む世界を作る一歩となる。「まだ幼いから」と臆せず、夢や不満を一票に込めたい。投票所で悩んだとしても、その時間が自分を成長させるはずだ。

小社会 文豪、森鷗外が自宅で迎えた最期の場面を思い返す…

高知新聞 2016年7月9日

文豪、森鷗外が自宅で迎えた最期の場面を思い返すたびに、かくありたいと願う。枕元にいたのは親族のほかには、生涯の親友が一人だけ。途切れ途切れの息が次第に間遠になってゆく。

不意に親友が鷗外に顔を近づけて礼をし、「では安らかに行きたまへ」。そう言って部屋を出た。皆がはっとした時、静かな死が訪れていたという。鷗外の妹、小金井喜美子が「兄君の最後」に記している。

厳かな緊張の中にも、心を通い合わせた者同士のぬくもりが感じられる。軍医総監や帝室博物館総長も務めた鷗外。死に臨んであらゆる栄典を拒み「石見人（いわみのひと）森林太郎として死せん」と欲した。その潔さにも通じていよう。

鷗外のような死は現代人の多くも望むところだろうが、実際には病院で亡くなる人が圧倒的に多い。厚生労働省の集計では、自宅で亡くなる人の割合も地域によって大きな差がある。訪問診療などの態勢の違いが要因のようだ。

高知のような高齢化先進県や人口当たりの病院数が多い地域では特に、「在宅みとり」が困難になる傾向が強まるのかもしれない。人生の最期を自分らしく暮らし、自分らしく逝く。当たり前前の望みをかなえることの何と難しいことか。

一方で凶悪なテロや犯罪が続く、地震や津波など自然災害の傷痕も生々しい今。畳の上や病院のベッドで死ぬことさえ難しい場合がある。やりきれない思いも募る、きょうは「鷗外忌」。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

